

「楠公史跡から歴史が見える。-近世・近代の楠公顕彰-」

尾谷雅比古

はじめに

「楠公」こと楠木正成が歴史上に登場するのは、鎌倉時代終わり元徳3年（1331年）から湊川で戦死する建武3年（1336）までのわずか五年。しかし、その間に後醍醐天皇の倒幕に応じて鎌倉幕府軍と戦い「建武政権」の樹立に導いた。その様子は軍記物語『太平記』に描かれ、それを元にした数々の評伝によって、正成像が作りあげられた。その正成像によって後世の歴史は、大きく動き、支配者層だけでなく多くの民衆にも影響を与えた。

1 楠木正成の復権

・南北両朝が合一した以後も楠木正成の後裔達は室町幕府に反旗を翻す。

（寛正元年（1460）3月28日「南朝將軍の孫、楠木某、その党と密かに謀反し・・・」）

楠木一族＝室町幕府の公儀上朝敵とされ、朝廷（北朝）からは勅勘（ちよっかん）を受ける。

・室町幕府の権威の衰退・戦国時代＝楠木一族に対する見方が変わる。また、楠木正成を戦略家として評価＝楠木流という軍学が広がる。

・伊勢国神戸（三重県鈴鹿市）の人、大饗（おおあえ）正虎（楠木正成11代孫と自称）

↓松永弾正少弼（しょうひつ）久秀の斡旋

永禄2年（1559）11月25日、正親町（おおぎまち）天皇より楠木一族の朝敵の勅免を受ける。

正虎＝正五位下楠河内守に任官、楠長譜（くすのきちょうあん）と改名。

これに、將軍義輝もしぶしぶ同意

2 徳川光圀と忠臣 楠木正成

・徳川家康 慶長8年（1603）征夷大將軍となる。朝廷に源氏「新田氏分家世良田得河家の末裔」の系図を提出し朝廷は「新田殿」と呼ぶ。系図を渡したのが足利氏の本流「吉良家」。

・徳川家の尊王思想担当が御三家の一つ水戸徳川家。藩主光圀は「大日本史」編纂事業を進め、南朝正統論を展開し徳川家の尊皇を正当化。その過程で、光圀は『太平記』を史書として位置づけ忠臣楠木正成を賛美。→元禄5年（1692）6月に湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」建碑 朱舜水（しゅしゅんすい）の賛辞を裏面に刻む。これ以降『太平記』は軍記物語とは違う歴史書の認識を世間に広め、教養書としても読まれた。

・新井白石も『読史余論』を著し「功臣において正成をもって第一とすべし」としている。

3 ヒーロー 楠木正成

3-1 太平記読み

・『太平記』は室町時代後半から物語僧などによる講釈、語りとして伝わる。

近世初期 本文とは別に注釈書が作られる—大運院陽翁がまとめた『太平記評判秘伝理尽鈔』（「伝」（本文にない異伝）と「評」（軍学、治世などの面から本文を論評した部分）から構成）。これをテキストに「太平記読み」が講釈

・「太平記読み」（浪人が中心）＝武士層に対する軍学書講釈・民衆相手とする太平記講釈

・軍学書講釈師は楠流軍学者。しかし、江戸時代の太平の世になると軍学講釈は人気なくなる。楠流兵法は近世初頭、陽翁伝楠流、南北流、河内流、河陽流等 主流は諸藩に理尽鈔を講釈していた大運院陽翁を祖とする陽翁伝楠流。そして彼らによって山鹿素行の序をもつ『楠正成一巻之書』や『楠兵庫記』『桜井之書』『恩地左近太郎聞書』などの偽書が流布される。また「非理法権天」が登場する。

・太平記講釈は楠木正成人気（判官びいき、大軍相手に互角に戦った英雄、諸葛孔明の再来）

幕末から明治維新の頃に人気のあったのが『太平記』『楠公記』『赤坂城軍』『湊川合戦』『楠二代記』『正行戦記』、また庶民向きの『南朝太平 中心往来』や『絵本楠公記』などを出版



正史にあらわれない正成のイメージが作られた。

3-2 今楠公

① 忠臣蔵

元禄・宝永ころに書かれた『江赤見聞記』に仇討ち当時の落書が載せられている。

「楠のいま大石となりにけりな（名）ほ（を）も朽せぬ忠孝をなす」

元禄15年12月14日の討ち入りからまもないころ、民衆から大石内蔵助は楠木正成の再来とイメージされている。敵役である高家筆頭吉良家は、足利家の名門名跡を継ぐ唯一の家。

大石内蔵助＝楠木正成×吉良上野介＝足利尊氏→吉良家断絶（足利家を滅ぼす）「七生までただ同じ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばや」

② 由比正雪の乱

慶安4年（1651）に楠木正成の嫡流と称した楠流軍学者由比正雪らは20万から30万という浪人を救済しようと幕府転覆の一揆を企て、失敗した事件。

この事件は宝暦9年（1759）に浄瑠璃『太平記菊水之巻』として上演、また実録小説『慶安太平記』などが出版され、幕府から禁書となったが、写本が出回りひそかに流布。



民衆→英雄（反権力・反体制）

4 幕末、討幕運動の精神的支柱と楠木正成

・徳川家を勤王の家として正当化しようとした水戸学の大義名分論（南朝正統、楠公神格化）。

幕末に先鋭化、水戸学後期の国家論が尊皇攘夷・倒幕派の理論的支柱となる。

・頼山陽の『日本外史』『日本政記』が平易な文章で幕末の尊皇攘夷派に楠公崇拜を鼓吹した。『日本外史』は、楠木父子に対する賞賛と建武中興に背いた足利氏への酷評など独特の史観とダイナミックな表現で幕末の志士たちの尊皇攘夷運動に与えた。特に『桜井訣別』は山陽によって史実化。

・山鹿流兵学（楠流軍学）吉田松陰の松下村塾では久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋などの塾生に「七生説」を説き、楠公を理想とする倒幕運動の志士たちを育て上げた。



志士達は、明治維新を「建武中興」とダブらせ、徳川幕府も足利幕府と同罪とみなし、自分たちを楠木正成とダブらせた。

5 神となった楠木正成

薩長土肥の倒幕派を中心に、南朝の忠臣として楠木正成を自分達とダブらせ、5月25日に儒教式の慰霊祭を行い、神格化させ崇拝した。

5-1 楠公祭

- ・ 尊皇攘夷派の藩や志士を輩出した各藩では、早くから楠木正成を祭祀する楠公祭が行われていた。
- ・ 久留米藩では尊皇攘夷派の水天宮官司真木和泉守が安政6(1859)年に楠公祭を執行。
- ・ 長州藩は文久3年(1863)、中山忠光(天誅組首謀者)・久坂玄瑞らが楠公祭。翌年元治元年に、亡命していた三条実美らが楠公祭。さらに同年に藩主毛利敬親(たかちか)が祭主となって大々的な楠公祭。
- ・ 薩摩藩では、安永6年(1777)鹿児島町の町田氏が楠公像を祭り、万延元年(1860)尊皇派の町田久成・有馬新七が楠公像を祭り、東郷平八郎、大久保一蔵ら多くの尊皇攘夷派が集まりの機運を高める。
- ・ 佐賀藩は、嘉永3年(1850)、楠公祭をおこない、枝吉次郎(副島種臣)や江藤新平など数百名が集り同志は義祭同盟と称した。安政元年(1854)には藩の鎮守、龍造寺八幡宮の末社を楠公社とし、祭典は家老鍋島安房が執行。
- ・ 津和野藩は、慶応3年(1867)に藩校養老館で平田派国学を信奉する藩主亀井茲監(かめいこれみ)が楠公祭。
- ・ 尾張藩は、公武合体派の藩主徳川慶勝が水戸家の出身で、熱烈な楠公崇拝者。安政3年(1856)から楠公祭。また楠木正成・和氣清麻呂・物部守屋をまつる霊社も設けた。

5-2 楠社の創建

- ・ 元治元年(1864)、薩摩の島津久光が摂津湊川に護良親王と楠木正成・北畠親房等を祀る神社の創建を朝廷に請願し認められたが、幕末の混乱で中止。
- ・ 王政復古のあと明治元年(1868)4月21日正成奉祀の御沙汰書が下された。

「楠社造営神号追諡及正行以下一族ヲ合祀ス」

神祇局並兵庫裁判所へ達

「大政更始ノ折柄、表忠之盛典被為行天下忠臣孝子ヲ奨励被遊候ニ付而ハ楠贈正三位中将正成精忠節義其功烈萬世ニ輝眞二千歳之一人臣子亀鑑ニ候故ニ今般神號ヲ追諡シ社壇造営被遊度思召ニ候依之金千両御寄附被為在候事」

政府は神号を追諡し、社壇造営を決定し、社殿が完成した明治5年(1872)4月29日に兵庫県に「楠社ヲ湊川神社ト称シ別格官幣社ニ列ス」の達があり、続いて5月24日に太政官布告で下記のように名称と社格が決定。

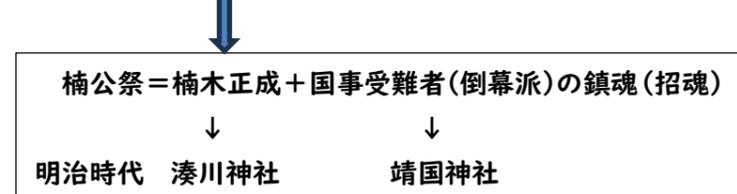
第壱百六拾六号 (五月廿四日) (布)

今般楠社鎮座ニ付自今湊川神社ト被稱候事

但社格ノ儀ハ別格官幣社ニ被列候事

明治元年(1868)5月25日初めて政府主催の楠公祭を京都の河東操練場で行った。

この後、正成だけでなく「南朝の忠臣」らが贈位や神社(別格官幣社)が創建された。



6 「忠君愛国」の鑑 楠木正成

幕末の争乱を生き抜いた志士達→明治新政府の役人となり国家を指導。

天皇を頂点とした近代国家を確立条件=天皇と国家に忠誠を尽くす国民を養成が必須。



楠木正成=国民のあるべき姿「忠君愛国」のモデル→顕彰、国民教化の材料

6-1 維新官僚の楠公顕彰

- ・ 旧大村藩勤皇派で幕末の剣客と知られ薩長同盟を斡旋した大阪府権知事渡邊昇(後に第4代知事)が桜井駅と思われるところに「楠公訣児之處」の碑を1876(明治9)年12月に建立。裏には英国公使ハリス・S・パークスの英文碑文。
- ・ 旧豊後岡藩勤皇派で初代堺県知事小河一敏は明治2年(1869)10月7日付で物部守屋の神号と墓の整備、建水分神社の南木神社への厨子寄進、正行のための小南木神社創設、湊川の楠社の名称を南木神社に統一すべきと政府に建白した。
- ・ 旧薩摩藩出身で薩摩閩の重鎮堺県令税所篤(西郷隆盛、大久保利通とともに薩南三傑)は、管内の楠公史蹟を整備した。○千早村(現千早赤阪村)の楠神社の修理、○観心寺楠公首塚の整備、○1878年(明治11)に四條畷に「従三位楠正行朝臣之墓」を建碑、○1885年(明治18)、元老院議員となった税所の発起により『四條畷表忠碑』を新たに建碑、○1878年(明治11)5月15日楠公誕生地に『楠公誕生地』を建碑。この一連の整備には、薩摩の盟友大久保利通・五代友厚・尊皇派で薩摩と行動した文人画家富岡鉄斎らが関与。1875年(明治8)2月の大阪会議で大久保が来阪し、税所が案内して南河内を遊獵し、楠公史蹟を巡ったときにその荒廃を憂いたのが契機とされている。

6-2 忠君愛国

維新官僚によって、顕彰される一方で、楠木正成、子の正行(まさつら)と楠木夫人は模範的国民の姿として、唱歌や歴史・修身の教科書に登場。特に国定教科書は楠木正成を忠君愛国・子の正行は忠孝両全・楠木夫人は良妻賢母の模範とし、戦前の子供たちの理想的な人物となっていた。特に『太平記』の一節「桜井駅の別れ」は、その物語性から江戸時代から知られていたが、教科書で内容が書き換えられて全国民に認知された。

『尋常小学読本』巻7は、明治42年(1909)に文部省が発行した国語の教科書。死を覚悟で足利尊氏の大軍を迎え撃とうしていた楠木正成が、父亡き後も後醍醐天皇への忠誠を尽くすよう諭して、11歳の息子正行を桜井の地(現・大阪府島本町桜井)で帰す場面(桜井駅の別れ)や、父の戦死を知って自害しようとする正行を、母が厳しく誡める場面などが絵入りで紹介されている。国定教科書になって以降、正成の記述は次第に変化し、特に歴史教科書の正成最期の場面は美化されるようになった。「湊川(みなとがわ)の戦いで討ち死にしました」→明治44(1911)年の改訂で「七たび人間に生まれて朝敵(ちょうてき)を滅ぼさん」→昭和9(1934)年には「わが国民は、皆、正成のような真心を持って、大いに御国(おくに)のためにつくさねばならぬ」と加筆。

まとめ

- ・ 鎌倉幕府方や足利幕府方から評価。(太平記・梅松論の記述)
- ・ 近世 為政者の手本→軍略家、名君。民衆→知略・智謀を尽くし寡兵で大軍を負かす英雄。
- ・ 幕末 水戸学後期 理想の尊皇家・倒幕家→維新の原動力
- ・ 明治維新 尊王愛国→明治・大正 忠君愛国 →近代天皇制国家の理想的国民像
- ・ 昭和前期 尽忠報国 忠君愛国の権化 七生報国(七生滅賊)→戦争遂行のプロパガンダ